教師の成長と派遣

ー「中年期の危機」を視座としてー

東京学芸大学海外子女教育センター　　高　木　光太郎

目　次

要　約
1．目　的
2．教職における「中年期の危機」
3．成長の契機としての「中年期の危機」
4．「中年期の危機」克服の契機としての派遣
5．まとめ

教師の成長と派遣

―「中年期の危機」を視座として―

高　木　光太郎*

要　　約

この研究ノートでは、海外の日本人学校・補習授業校への派遣が教師にもたらす専門家としての変化を、教職における「中年期の危機」とその克服という枠組みでとらえる可能性を検討した。まず先行研究の成果にもとづいて中年期の危機を熟達化がもたらす実践の硬直化として位置づけた。つづいて同様に先行研究にもとづき、この危機の克服において「異質な同僚」との出会いが重要であることを指摘した。以上の整理をふまえ、日本人学校・補習授業校への派遣が中年期の危機の渦中にある教師にどのような影響を与えうるか考察した。日本人学校・補習授業校は多くの点において状況に応じた柔軟な実践への対応が要求される場であり、そこで活動する教師集団への参加は派遣された教師にとって「異質な同僚」との出会いとなりうる可能性が高く、中年期の危機の克服の重要な契機となりうるとの見解が示された。

1．目　　的

現在、世界各国におよそ270の日本人学校、補習授業校があり、そこには国内の小・中学校からおよそ1300人の教師が派遣されている（文部省教育助成局海外子女教育課、1998）。これら派遣教師は、学校組織、施設、カリキュラム、教材、あるいは生徒の生活のありようなど、さまざまな面で日本国内とは異なる現場で実践を組み立てていかなければならない。生活面においても、日本とは習慣や環境が大きく異なる場で日常生活を（多くの場合家族と共に）つくりあげていくことが求められる。

派遣にともなう教育実践面、生活面でのこうした劇的な変化は日本国内で一定の教育経験を積んできた派遣教師にとって、自らの実践を問い直し、それをより充実させていくための重要な契機となる。たとえば、やや古い資料になるが、平成元年度に全国海外子女教育研究協議会がおこなった調査によれば、「海外生活によって考え方や生き方が変わりましたか」という質問に対して、調査対象となった派遣経験者1198名の回答者のうち97.9パーセントがなんらかの点で変わったと答えている。また「海外生活によって、児童・生徒への対応が変わりましたか」という質問にも、85.0パ

*東京学芸大学海外子女教育センター

ーセントの教師がなんらかの点で変わったとする回答をしている（全国海外子女教育研究協議会、1988）。さらに東京学芸大学海外子女教育センターが発行する「在外教育施設における教育指導・実践記録集」によせられた帰国直後の派遣教師による実践記録にも、派遣が教師に様々な「気づき」や変化をもたらし、それが帰国後の実践の充実へとつながっていくことを示す記述が数多くみられる。たとえばカラカス日本人学校から帰国した中川は、社会科副読本の制作に関する実践報告を次のように締めくくっている（中川、1996）。「私はこの3年間本当に充実した教育活動に携われたことを心から感謝しているが、それもこの副読本制作を抜きにはとうてい考えられない。主体的なとか、国際性豊かなとか、教師はだれもが理想像を子どもにいだいているが、教師自身がそうであろうとしたとき、自然と子どもはそうなっていくのだということを経験をとおして実感できた。これらの経験をもとに、日本での教育活動に真摯な気持ちで臨んでいきたいと思っている。」海外の日本人学校、補習授業校への派遣は、教師の能力を海外に住む子供たちのために提供する機会であるばかりではなく、教師自身の成長の契機としても大きな意味をもつのである。

しかしながら海外派遣という体験が教師の教育実践のありように実際のところどのような変化をもたらすのかということは、これまでほとんど検討されていない。上で示した調査や実践報告なども教師自身によるおおまかな回想的評価であり、派遣という体験が教師のどのような側面に、どのような変化をもたらすのかということを具体的に示すものではない。

上述のとおり海外への派遣は、教師に教育実践面、生活面の大きな変化をもたらす。したがって派遣を契機とした教師の変化は、研修などによって特定の知識や技能を獲得していくような短期的、断片的な「学習」過程としてとらえることはできない。初任期から数十年におよぶ教師としてのライフコースのなかに派遣が位置づけられ、理解されること、つまり教師の生涯発達過程における重大な（少なくとも意味のある）事件、出来事としてとらえなければならない。そのための理論と方法論が必要である。しかし、それらはいまだに十分に整備されていない。

この研究ノートでは、派遣される教師の多くが30～40代のいわゆる「中堅教師」であることに注目し、派遣が教師にもたらす変化を教師の「中年期の危機」とその克服という視点からとらえる可能性を検討する。以下に示すように、この概念は教諭として海外に派遣される年代の教師が体験するライフコース上の危機の構造と、その創造的克服によるさらなる成長の可能性を視野に入れた分析概念であり、派遣が教師にもたらす成長のありようを検討するための有効な理論的、方法論的ツールの一つになりうると思われる。

2．教職における「中年期の危機」

教職について間もないため、様々なとまどい、困難、挫折に出会う「初任期」の教師にくらべて、教職10年目から20年目頃までの「中年期」の教師は、一般には安定した時期にあると考えられている。しかし教職における中年期の意味について研究をすすめている高井良によれば、この時期の教師には初任期とは質的に異なる「中年期の危機」が存在する（高井良、1994）。

この時期の教師は、教科内容の知識、教育技術などが一定の水準に到達することで、日々の授業では安定した成果をあげることができるようになっている。しかし、この安定は、一方で授業の「ルーティン化」という問題をひき起こす。知識、技術の向上が、逆に教室における教師の行動を定型的なものにし、子どもとの関係の硬直化をもたらすのである。さらに、この時期の教師は学校組織においても責任のある立場に立つことが多くなる。日本の学校の場合、「職階級制度の上昇が教室から離れることでしか成し遂げられないという矛盾」、つまり学校組織のなかで責任のある位置につき、その責任を全うしようとすればするほど、本来の職務である授業づくりや教室での子どもとのかかわりに注ぎ込む時間が少なくなるという構造があり、教師はそのディレンマに苦しむことになる。初任期の教師が学校という職場で有能になっていくこと、つまり、いかに教師として社会化していくかということに関して「危機」を経験するのに対して、中年期の教師は「社会化を通した硬直化」という危機にさらされているのである。

このように「中年期の危機」は、教師の社会化がもたらす閉塞状況であり、それゆえ高井良が指摘するように「教職への社会化が成功したすべての教師が、中年期の危機に遭遇する可能性をもっている」。もちろん海外の日本人学校、補習授業校への派遣を希望する、あるいは実際に派遣される教師も例外ではない。彼らの多くが、意識的ないしは無意識的にこうした危機の渦中にある可能性は高い。

3．成長の契機としての「中年期の危機」

しかし中年期の危機がもたらす硬直化、閉塞状況は単に教師の成長の停止を意味するわけではない。発達心理学者Ｌ．Ｓ．ヴィゴツキーは人間の心的発達において、動的な変化の可能性を孕んだまま心的システムの諸力が均衡している状態を「最近接発達領域（zone of proximal development）」とよんだが（ヴィゴツキー、1962）、「中年期の危機」はまさにそのように理解されるべきものである。というのも上述のように、中年期の危機は相異なる実践上の諸要求が教師を挟み込んで身動きをとれなくしてしまうディレンマ状況であり、外見上の停止の背後には諸要求のダイナミックなぶつかりあいがあるからだ。この膠着状態がなんらかの理由で揺らいだとき、そこには大きな構造的変化が生じる可能性がある。

では実際に「中年期の危機」の閉塞状況を新たな変化へと転化していく契機になるのは何であろうか。一般的にいって、教師の変化の契機として他の教師との出会いは重要である。たとえば定量的な手法による教師のライフコースの研究をおこなった山崎の調査結果によれば、「自分の教育実践や教育に対する考え方に影響を及ぼし、変化を生み出したと思われる事柄」を、自分にとって重要な順に第３位まであげさせると、教職歴の長さにかかわりなく、多くの教師が「学校内でのすぐれた人物との出合い」をあげている（山崎、1994）。

もちろんこうした変化の契機としての出合いの内実は教職歴の長さに応じて異なったものになる。山崎も指摘しているように、比較的若い時期（教職歴４～５年）には、「自己の実践上の『つ

まづき』感や『空回り』感に対して、身近にいる経験豊かな先輩教師や指導者から的確で具体性をもってアドバイスを得ること」が力量形成の重要な契機となる場合が多い。つまり実践の手本となり、目標となるような先輩、指導者との出合いが意味をもつのである。だが高井良によれば「中年期の危機」に直面している中堅教師の場合には異なった種類の出合いが重要になる（山崎はこの点は考察していない)。「中年期の危機」を迎えた教師が必要とするのは、自分を導いてくれるような先輩や指導者ではなく「問題を共有しつつも、異質な実践をおこなっている同僚教師」との出合いである。これは、この時期の教師に必要とされることが自己の実践の反省的なとらえなおしと、それを通じた新しい独自の実践のありかたの模索であり、決して他者の模倣ではないからであると思われる。「中年期の危機」に直面している教師にとっては、自分とは大きく異なる実践のスタイルや考え方をもっている同僚たちとの出合いによって、それまでの固定化した役割規定や子どもとのかかわり方が揺さぶられ、自己の実践に対する深い問い直しの作業がはじまることが重要なのである。

4.「中年期の危機」克服の契機としての派遣

このように「中年期の危機」の克服において「異質な同僚」との出合いが重要な役割を果たすとするならば、日本人学校や補習授業校への派遣は「中年期の危機」を新たなキャリア・ステージ構築の足場として創造的に克服するための絶好の機会となるだろう。というのも日本人学校や補習授業校では「異質な同僚」に出会う可能性が非常に高いからである。日本人学校や補習授業校において「異質な同僚」に出会う可能性が高いというのは、単に出身都道府県の異なる教師たちによって構成されているとか、イマージョン、語学、現地理解教育などの授業のために現地採用の講師たちとの共同作業があるといったことを意味するのではない。そのような個々の教師の属性の問題ではなく、日本人学校や補習授業校で求められる教育実践の構造の違いが、派遣教師に「異質な同僚」との出合いの機会を提供すると考えられるのである。

派遣された教師の回想や実践報告でよく述べられるように、海外の学校では学校の運営のスタイルや教師への要求が国内とは大きく異なる。日本人学校や補習授業校はあくまでも現地邦人が設立した私立学校であり、その運営の基本的方針の決定には（時には細かな事柄まで）親や現地企業の代表からなる理事会が大きな影響力をもつ。このような運営スタイルには、たとえば教師による教育上の専門的判断にかかわることに親や理事たちが必要以上に介入するといった問題がないわけではない。しかし、一方で日本国内の公立学校にみられるような、いわゆる上意下達型の行政的意志決定システムではなく、教師と親や理事が学校のありかたについて議論し、それが直接授業や学校運営のありかたに反映していくといった対話的な意志決定スタイルがとられることが珍しくない。状況の変化に応じて学校の運営について当事者同士が話し合い、方針を決定していくという機会が国内にくらべ圧倒的に多くなるのである。

こうした柔軟で対話的な事態への対応はそれぞれの教師が自分の授業や特別活動を組み立てていく際にも頻繁にもとめられる。よく言われることだが、日本人学校、補習授業校では学習指導要領

に準拠した授業をおこなうための教材の確保が困難なことがよくある。たとえば、理科で植物の成長について教える場合に、教科書に載っている植物が現地では育たない場合がある。また、天体の運動についても南半球では教科書どおりに教えることは困難である。社会科などで公共施設の役割などを教える場合にも苦労があるだろう。こうした場合、教師は現地で手配可能な素材をさがし、それらの素材を使っても教えることのできる教科内容の本質的部分について再検討し、具体的な授業の組み立てを考案しなければならない。もちろん各学校にはそれぞれ現地の状況にあわせた教材や授業案の蓄積があるわけだが、国内での教育内容の変化、現地の社会状況の変化、子どもの数や要求の変化などにあわせて、常にあらたな工夫が要求されるのである。また一見、日本での「普通のやり方」が使えそうな場合でも、現地の特性を深く考えた場合には新たな試みをすすめる必要がある場合も多い。たとえば、ミラノ日本人学校に赴任した宮澤は、イタリアには数多くのすぐれた美術品が存在するものの「テレビや過剰な情報に混乱している人間にとっては、この偉大な遺産も記念写真のための背景としか認識できない」という問題意識から、子供たちに別の視点からイタリアを理解させることを試みた（宮澤、1997）。周囲に数多くある作品を美術全集の代替物のように使うのではない授業をもとめたのだ。また、「パスタを使った絵」「ワインのコルクを使った工作」といった「よくある」現地教材の活用も「ミラノでなければ」という点が不十分であり、安易であると退ける。そして宮澤は美術界においてミラノが「発表の場」として高い評価を得ていることに注目し、6年前からミラノ日本人学校がおこなっている「ミラノ日本人学校作品展」のような「『発信する』教材」こそが、「『地の利』を生かした現地教材」であるという考えに至り、その充実をめざすことになる。宮澤は、いわば、ミラノという土地との対話によって実践を深めようとしたのである。

特別活動の場合も、現地の社会状況や交通、治安状況に応じて、たとえば遠足や修学旅行、現地校との交流などの計画を立て直すことが求められることはよくある。むしろそうした予期せぬ事態を逆手にとって、より深みのある活動へと展開してしまうような柔軟さがもとめられるのである。たとえば台中日本人学校から帰国した稲垣は、台風の影響で林間学校の宿舎を変更せざる得なくなり、あわてて決定した代替地の農場にも様々な制約があるといった困難な状況のなか、農場の近所に住む「霧社事件」（70年ほど前に起きた大規模な対日抗争事件）の生き残りの女性の存在を知り、その女性の体験談の聞き取りを計画し、大きな成果をあげたことを報告している（稲垣、1977）。日本人学校や補習授業校ではこうした状況への「即興的な」対応が大いにもとめられるのである。

このように多くの日本人学校や補習授業校は、学校運営、授業、特別活動など教育活動の諸相において、完成されたルーティンの機械的適用ではなく、状況のありようや変化に応じて対話的で柔軟に実践を組み立てていくことが求められる。状況維持的、再生産的な性質をもつ日本国内の学校（派遣教師たちはここで「中年期の危機」に直面していた）と異なり、日本人学校や補習授業校では場の再定義や再構造化が常に、さまざまなレベルで進行しており、教師たちにはそうしたダイナミズムを維持していくことが否応なくもとめられるのである。これは一方で混乱や不十分な教育実

践の原因にもなるが、同時に上で示した例のような実践の深まりにつながっていく。

こうした状況が日本人学校や補習授業校の教師集団に、日本国内のそれとは異質な特性、つまり対話性、即興性、柔軟性といった性質を付与することになる。このような特性をもった教師集団に出会うことは、国内の学校から新たに赴任する教師にとって、多くの場合「異質な同僚集団」と出会うことを意味すると考えられる。しかも、その異質な同僚集団は上述のように、場へのルーティン的な対応が困難な状況で、常に実践の吟味や作り直しを余儀なくされながら共同的に実践をつくりあげている集団である。日本人学校や補習授業校が「中年期の危機」を抱えて赴任した教師に成長の契機を提供する可能性はここにあると思われる。

さらに、多くの点で国内の学校とは異なる日本人学校や補習授業校への赴任によって、中堅教師はいま一度「新任の教師」となり、少なくとも半年か1年は国内の学校において彼らを縛ってきた校務分掌上の重い責任から開放されることになる。この点も「中年期の危機」の構造を考えると重要なことである。

もちろん、高井良も強調しているとおり「中年期の危機」の克服においては、こうした異質な集団への参加という水準を超えて、固有名の重要な他者との「出合い」が本質的に重要である。そうした具体的な他者との実際の対話や仮想的な内的対話が実践の再吟味にとって極めて重要な契機となるからだ。こうした出合いは、いわば「運命的」「偶発的」なものであるから、派遣が常にこうした「中年期の危機」克服の本質的契機を提供してくれるとは限らない。しかし、日本国内でそれまでのディレンマの構造を再生産しつづける場の中にとどまったまま、その閉塞感の中で異質な同僚との出合いを模索し、自分を取り込んでいるディレンマ構造（学校という場が教師にもとめる現実的な諸要求の構造）を自力で変革していくことの困難さと比較した場合、善し悪しは別にしてルーティン的な実践への対応が破たんせざるを得ない場の中に飛び込んでいくことのほうが、「社会化による硬直化」の打破は容易であると考えられる。

以上の理由から、海外の日本人学校や補習授業校への派遣は教師の経験する「中年期の危機」の創造的克服の契機として大きな可能性をもつものと考えられる。

5．まとめ

この研究ノートでは、海外への派遣が「中年期の危機」を抱えた教師の重要な変化の契機となりうるという、やや楽観的な立場から、派遣と「中年期の危機」の関係について予備的な考察をおこなった。以下に要約する。

(1)「中年期の危機」は社会化に成功した中堅教師であれば皆経験する可能性があり、派遣教師の場合も一定数が意識的あるいは意識することなくこの危機を経験している可能性が高いことが予想される。

(2)「中年期の危機」を創造的に克服するための重要な契機は異質な同僚の存在である。日本人学校や補習授業校の教師集団は、その学校運営や実践の構造のため派遣された教師にとって「異

質な同僚集団」としてあらわれる可能性が高い。このため「中年期の危機」を抱えたまま赴任した教師にとって派遣先で教育実践にとりくむことは、危機の創造的克服の重要な契機になりうると予想される。

派遣が教師にもたらす変化の全体像をここで検討した「中年の危機の創造的克服」という視点のみによって理解することは、当然のことながら不可能である。たとえば派遣先で得られた成長が帰国後のキャリアの中でどのように位置づくのかということを考えた場合、派遣による「中年期の危機」の創造的な克服というヴィジョンは視野狭窄的かつ楽観的過ぎるものとなる危険性が高い。おそらく派遣期間中に本質的な転換を経験した教師は、帰国後もなんらかのかたちでその転換に導かれた実践をすすめていくことになるだろう。しかしある場合には、そうした帰国後の実践への取り組みが赴任先の学校でもとめられることとうまく噛み合わず、新たなディレンマ構造に教師がとりこまれる可能性もある。派遣を契機とした教師の変化をライフヒストリー上の重要な事件として問題にするならば、帰国後の状況も考慮に入れたより長期的な視野をもったアプローチが当然必要であろう。だが、派遣と教師の専門的成長との関係の実証的解明というこれまでほとんど検討されることのなかった問題に着手するための第一次的な作業仮説としては、この研究ノートで検討した視点にも一定の有効性があると考えられる。

《引用文献》

稲垣健　1997　海外教育施設における集団宿泊的行事の活用：林間学校を利用した国際理解教育の実践　東京学芸大学海外子女教育センター編　在外教育施設における指導実践記録、20、66－69.

宮澤知　1997　ミラノ日本人学校における図工・美術教育の実践：発信型の現地理解教育のありかた　東京学芸大学海外子女教育センター編　在外教育施設における指導実践記録、20、11－14.

文部省教育助成局海外子女教育課　1998　海外子女教育の現状

中川好美　1996　子どもたちの主体的学習をめざして：ヴェネズェラにおける社会科の教材開発副読本「みんなで学ぶ社会科」制作　東京学芸大学海外子女教育センター編　在外教育施設における指導実践記録、19、112－115.

全国海外子女教育研究協議会　1988　帰国教員の実態調査報告書

高井良健一　1994　教職生活における中年期の危機：ライフヒストリー法を中心に東京大学教育学部紀要、34、323－331.

ヴィゴツキー、L．S．柴田義松訳　1962　思考と言語　明治図書

山崎準二　1994　教師のライフコースと成長：卒業生追跡調査を通して　稲垣忠彦・久富善之編　日本の教師文化東京大学出版会

ABSTRACT

"Mid-Career Crisis" and Teacher's Development in Japanese School Overseas

Kotaro Takagi*

The purpose of this article is to depict an outline of the idea that teacher's developmental change in Japanese school overseas can be analyzed as overcoming of their "mid-career crisis." In Japan, according to studies on life histories of teachers, many mid-career teachers undergo a conflict between socialization and stabilization in their teaching. The more they become skillful in teaching and responsible in school administration, the more their teaching styles become routine. To the contrary, in Japanese school overseas, teachers are always required flexible and dialogical styles of teaching and administration. This means that teaching in Japanese school overseas is good chance for mid-career teachers to overcome their "crisis." By meeting colleagues who have improvisational styles of teaching, mid-career teachers begin to reflect their own styles of teaching and reconstruct their teaching skill.

*Center fot the Education of Children Overseas, Tokyo Gakugei University